

About the Ming-Qing Orchestral Music in Hama Kazue 濱一衛 Collection

中尾, 友香梨
佐賀大学講師

<https://doi.org/10.15017/13199>

出版情報：中国文学論集. 37, pp.121-135, 2008-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



瀨文庫の明清樂資料について

中 尾 友香梨

はじめに

九州大学附属図書館の瀨文庫には、瀨一衛氏旧蔵の明清樂資料が十点ほど所蔵されている。瀨氏は生前、中国の演劇や戯曲の研究に携わり、日本の明清樂についても珠玉の論考を後世に残した¹⁾。明清樂に関しては、まだ系統的な研究がほとんど行なわれていなかった当時において、氏の研究はまさに草分け的存在であつたと言える。特に氏による「清樂伝承系譜図」は、その後の多くの明清樂研究が依拠するところとなつており、その学術的価値は極めて高い。このような意味でも、瀨文庫に所蔵されている明清樂資料は、大変貴重なものである。筆者は二〇〇八年五月から六月にかけて、当時六本松分館に設置されていた瀨文庫の明清樂資料を調査する機会を得たが、本稿はこの時の調査結果を紹介するものである。

一 明清樂と瀨文庫の明清樂資料

明清樂とは「明樂」と「清樂」の総称である。言うまでもなくこれらは、日本に伝わつた明の音楽および清の音楽を指すが、明樂の中で圧倒的に主流を成したのは、寛文年間（一六六一～一六七〇）に來日した福建人魏之琰（きしえん）（一六八〇～一六九〇）による「魏氏樂」である。古樂府・唐詩・宋詞・明詞を主な内容とし、華音の歌に十一種類の管・絃・打楽器

瀨文庫の明清樂資料について

による合奏を伴う魏氏楽は、頗る莊重で雅な音楽であり、京都の漢学者を中心に、公家・武士を含む教養人の間で
もてはやされた。その結果、宝暦九年（一七五九）頃には『魏氏楽器』という書物が、また明和五年（一七六八）には『魏
氏楽譜』という明楽稽古テキストが、さらに安永九年（一七八〇）には『魏氏楽器図』が刊行され、文化人の間で広く
読まれた。演文庫には後者の二点が収蔵されているが、いずれも九州大学中央図書館蔵本の写真版であるため、こ
こでは目録を掲げるにとどめたい。

〔資料1〕『魏氏楽譜』一卷（九州大学中央図書館蔵本写真版）

演文庫／新字音楽／一二

魏子明輯、明和五年（一七六八）、京都芸香堂板

〔資料2〕『魏氏楽器図』一卷（九州大学中央図書館蔵本写真版）

演文庫／新字音楽／一三

筒井郁（景周）撰、安永九年（一七八〇）、京都松寿亭板

ところで、宝暦・明和年間をピークに大変流行した明楽であるが、文化文政年間を境に、新たに伝来した清楽に
よって徐々にその流行の座を奪われた。長崎来舶の清客たちによって伝えられた清楽は、その内容と性質が明楽よ
り遙かに通俗的であり、当時中国江南で流行した時調小曲つまり都市俗曲がそのものになっている。明楽と同じく、
華音の歌に管・弦・打楽器の演奏を伴い、特にエキゾチックなメロディーとユニークな楽器で特徴づけられる清楽
は、頗る人気を博し、やがて長崎だけでなく、江戸・京都・大坂の三都を中心に、静岡・高岡・名古屋・福井・新
潟・津・松本・前橋・高田・福岡などの各地で流行するようになり、日清戦争の勃発直前まではやり続けた。

清楽は幕末を経て、明治初期から中期にかけて隆盛を迎えたが、その前後に刊行された楽譜は、現存するものだ
けでも計八十四種類が確認されている。これらの清楽譜は主に国立国会図書館（六十一種類）、長崎県立図書館
（三十種類）、上野学園日本音楽資料室（三十九種類）などに収蔵されているが、九州大学附属図書館の演文庫にお
いても、以下の八点が確認された。

〔資料3〕『清楽曲牌雅譜』一帙三卷三冊

演文庫／集五一／一〜三

河副作十郎編選、渡邊凍月校、明治十年、大阪杏村書舎蔵版

和装袋綴、中本（十九・四×十二・六糎）、表紙褐色無地、活字版

〔資料4〕『月琴楽譜』一帙二巻二冊(利・貞) 瀧文庫/集六六/一〇三

平井連山著、中井新六編輯兼出版、明治十年、大阪飛来堂蔵版、群仙堂梓
和装袋綴、小本(十七・九×十一・五糎)、表紙褐色無地、活字版

〔資料5〕『明清楽譜』一帙三巻三冊(天・地・人) 瀧文庫/集四三/一〇三

平井連山著、長原梅園・瀧野廬白校、明治五年、大阪飛来堂蔵版
折帖、豆本(十二・三×七・六糎)、表紙黄色無地、木版

〔資料6〕『明清楽譜』一帙三巻三冊(雪・月・花) 瀧文庫/集四四/一〇三

吉見重三郎編輯、刊行年・刊行地不明
折帖、豆本(八・七×五・三糎)、表紙黄色無地、木版

〔資料7〕『明清楽譜』一帙六巻六冊(天・地・人・雪・花・月) 瀧文庫/集四五/一〇六

植西鉄也編著、明治二十七年、京都若林堂出版
折帖、豆本(八・八×五・二糎)、表紙黄色無地に金泥の山模様あり、木版

〔資料8〕『明清楽歌譜』一帙二巻二冊 瀧文庫/集四二/一〇二

宇喜多小十郎編輯、明治十年、滋賀鳥居兵吉出版
折帖、豆本(十一・五×六・六糎)、表紙黄色無地、木版

〔資料9〕『清楽詞譜和解』一巻一冊 瀧文庫/集六五/一〇一

田中參著、明治二十五年、東京文学館出版
洋装本(一八・八×一二・七糎)、表紙に月琴・胡琴・清笛の絵あり、金属活字版

〔資料10〕『資料8の写真版』 瀧文庫/新字音楽/一六

以下、これらの資料について紹介を加えよう。

二 河副作十郎編『清楽曲牌雅譜』

この楽譜に関しては、波多野太郎編『月琴音楽史略暨家蔵曲譜提要』（横浜市立大学『人文科学』第七篇『中国文学』第七号、一九七六年十月）に影印が掲載されているが、明治初期の明清楽および中国語に関する極めて重要な資料であるため、煩を厭わずここに紹介する。

紺色無地の帙に、『清楽曲牌雅譜ノ四胡小蘋ノ題簽』と記された短冊型題簽が附されており、表紙には題がない。第一冊にのみ見返がついており、これには『瓊浦河副作十郎編選ノ清楽曲牌雅譜ノ丁丑夏日刊杏村書舎蔵版』とある（図版1）。長崎の人、河副作十郎が編選し、明治十年（一八七五）夏に刊行されたことがわかる。編者の河副作十郎および版元の杏村書社については、後にふれることにし、まず序文を見ることにしよう。

『清楽曲牌雅譜』には計六篇の序文が附いているが、『月琴贅言』と題された冒頭の序文は、題簽を書いた寧波の胡小蘋こと胡震が一八七七年六月に兵庫県で著したものである。主に月琴の由来について述べ、『曩唯崎陽間有之、蓋由商舶東渡焉。今兩京士女好者甚衆、行見易三絃為四絃、佳人皆抱滿月于懷矣』と月琴の流行にふれ、さらに、『吁、八音五律隨風變、更易齊魯而鄭衛、君子於此感慨係之』と、雅な古楽が廃れ通俗的な清楽がはやり出した世風に対する、文人の複雑な気持ちを吐露している。

胡震と言えば、清代の有名な書家・篆刻家である胡鼻山を想起しやすいが、恐らくは同姓同名の別人であろう。兵庫県に滞在した清客の一人と見ておきたい。因みに、この人物は藤井竹外の『廿八字詩集』（大阪、明治十六年刊）にも批評を寄せており、明治初期の文人たちと親密な交流をもっていたことが窺える。

二篇目の「叙」も同じく胡震によるものであるが、『茲有杏邨何君、籍隸日本、性好風流、購到中華書本、數連環之九九、編成六律詞章、拍絃索以三三、剪紅刻翠』と、河副作十郎が自ら購入した中国の書物をもとに、『清楽曲牌雅譜』を仕立てた経緯について述べている。

三篇目は河副作十郎による『月琴譜自序』であるが、『夫唐山之月琴、未識出自何人之作、畧觀其譜、非古世之樂、然上尺工六五者、古樂一越調之宮商角徵羽也。雖然無一調如古樂之美、亦可以養性情。昔於長崎行焉、漸及京

攝。今好之者衆、縁以所存之譜、上梓以贈同好云」と、月琴音楽が古楽とは較べものにならないものの、人の性情を養つに役立つとし、私蔵の楽譜をもとに、『清楽曲牌雅譜』を刊行する運びとなったことについて述べている。なお「月琴譜自序」は梁文玩という清客によって代書されているが、この人物も胡震と同じく当時の日本人とかなり親密な関係にあったと見られ、石橋雲来（一八四七—一九〇四）の『雲来吟交詩』にもその名が見える。

四篇目の序文には、「杏村河副氏、通清国語、兼明四声、嘗校定樂歌集、録成編。凍月渡邊氏、調其書譜、序其音律。人歎其精妙矣。（中略）渡邊女史、当世之知音也。予每與聞律呂之說、隨聞隨書、積成書、名曰律說」とあり、「滄露富映堂謹識 印 池氏 映堂」の落款が附されている。作者が誰かは不明であるが、一つの可能性として、音律や楽器に堪能であつた漢学者、池田正信（通称富三郎）が考えられる。考を待つ。

五篇目の序文は、楽譜の校訂者であり、音楽の専門家である渡辺凍月による楽律説であるが、音律の十二律配当表、太極図、琵琶・笛・月琴・胡琴の口絵、及び清人の清楽演奏図などが掲げられている（図版2）。

「詳瑞庵主人楨里山行誌 雲暉瀧山瑄書」と落款された最後の序文には、簡略ではあるが、河副作十郎の事跡が紹介されているので、全文をここに引用しよう。

河副先生、名八作十郎、杏村ト号ス。崎陽人也。家世訳官ヲ奉勤スル（コト）既二三百有余年。故二先生幼年ヨリ清国語学ニ通ジ、併セテ清歌ヲ編輯スルニ意アリ。今茲二明治十年秋八月浪花僑居（ニ）於テ、嘗ツテ其学ブ所ノ清歌ヲ改正シ、清楽曲牌雅譜ノ一卷ヲ編シ、以テ其道ニ従学スル者ノ裨補賛與セラレタリ。是レ則提要ノ書ト謂フ可キ者也。³

河副氏が長崎の唐通事家系の出身で清朝の言語に通じていたこと、寄留先の大阪でこの楽譜を編纂・出版する運びとなったことなどが記されている。宮田安著『唐通事家系論攷』（長崎文献社、一九七九年）には、福建省泉州にルーツをもつ唐通事河副氏の家系が紹介されているが、第九代までしか記述がなく、作十郎はその次の第十代であると思われる。

版元の杏村書社は、作十郎が大阪で開設した私塾の名前であり、明治初期に中国語を教授した数少ない私塾の一つである。したがって、河副作十郎が『清楽曲牌雅譜』を刊行したのは、無論営利的目的も強かつたと思われるが、

中国語の普及を目指す狙いもあつたのではなからうか。その証拠の一つとなるのが、この楽譜には、他の明清楽譜では全く見受けられない次のような断り書きが記されていることである。

「文中、国字ヲ訓シ難キ字ハ、左ノ方ニ一印ヲ以テシ、更ニ他日ノ口伝ヲ要ス。」

江戸期および明治期に刊行された殆どの明清楽譜には、片仮名で中国語の発音が記されている。しかし、片仮名ではどうしても中国語の正確な発音を表記し難い漢字もあり、そうした文字の発音に関しては、他日の口伝が必要であるというのである。つまりこれらの文字の正確な発音を知りたければ、直接中国語を習いに来てほしいということであろう。そういう意味でも、河副作十郎が『清楽曲牌雅譜』を刊行したのは、単に清楽を普及させるためというより、清楽流行のブームに乗じて中国語の普及を目指す狙いがあつたと考えるのが妥当であろう。まして彼は音楽の専門家ではなく、ただ自分が購入して持っていた中国の楽譜をもとに、得意な中国語で歌詞の発音を表記し、音律の校訂はすべて専門家の渡邊凍月に依頼していることから、そのようなことが窺えよう。

『清楽曲牌雅譜』の第一巻、第三巻には、それぞれ三十一曲、三十曲、十一曲の清楽曲が収められており、前二巻に比べ、第三巻に収録された曲数が極端に少ないのは、第三巻の収録曲がいずれも戯曲に由来する長篇の曲だからである。本文は、工尺譜が前、歌詞が後の配置で構成されており、処々挿絵も見える（**図版3**）。

第三巻の巻末には、「孟浩然・水滸伝ノ一曲モ続テ出版仕候間、看官幾久敷御愛覧ノ程、伏而奉願上候。以上。版元敬白」との広告が掲げられており、奥付には発売所が列記されている。そのリストには、東京の書肆が一、京都が四、大阪が八、堺・長崎・神戸がそれぞれ一で、計十六の書肆が記されており、三都を中心にその他の地方でもこの楽譜が大々的に売り出されていたことがわかる。

三 平井連山著『月琴楽譜』

この楽譜は本来、元・亨・利・貞の四巻で構成されていたはずだが、瀆文庫には後の二巻のみが収蔵されている。表紙に短冊型の題簽が附されており、「月琴楽譜」の題の下に**田****寿**の篆字が未刷されている（**図版4**）。その筆

跡や落款から、村田海石⁵の書であることがわかる。海石は、その書が多くの学校の習字手本として採用され、当時より既に著名な書家であった。このような売れっ子の書家が『月琴楽譜』の題簽を揮毫したことは注目に値する。利巻の見返には「明治十年十月新鐫／月琴楽譜／群仙堂梓」とあり（図版5）、明治十年に「群仙堂」という書肆によって出版されたことがわかる。一方、遊び紙には「飛來堂蔵版」の方印が捺されている。「飛來堂」とは著者平井連山の苗字の二字をもじった堂号であろう。平井連山（一七九〇～一八六六）は、江戸後期から明治中期にかけて活躍した代表的な清楽家の一人である。江戸の蒔絵師平井均卿の長女として生まれ、妹の梅園とともに、長崎帰りの曾谷長春などから清楽の伝授を受け、後に大阪へ移って清楽の普及に尽力した。関西で隆盛を誇ったその流派は、東京における鍋木深庵（一八一九～一八七〇）の溪庵派と対峙し、連山派と呼ばれた。

利巻の巻頭には、多数の題辞・讚詩などが並べられている。まずは、篆書で記された「一代阮咸能創物、千年方澹是知音」の題辞であるが、その落款には「七十九老可亭信印」^{子文}「磊落先生」とあり（図版6）、書画家・篆刻家として活躍した羽倉可亭⁶によることがわかる。続いて「寄題連山子月琴」と題された漢詩が掲げられており、落款に「丁丑九月廿一日、琴仙書至、求題詩。是夜適中秋也、故及。霖外印」^{長梅外}とある。漢学者長梅外⁷のものである。さらに口絵と画賛が掲げられており（図版7）、これには「直入山樵癡印」^{直入}の落款が附されている。言うまでもなく、田能村竹田の養子直入⁸によるものである。その後にもまた讚詩が続いているが、これは維新時代の彦根藩士で明治五年には左院の一等議官を務めた谷鉄臣⁹のものである。

このように、平井連山の『月琴楽譜』巻頭には錚々たる顔触れの題辞や讚詩が並べられているが、実は巻頭だけでなく、本文中も二、三曲おきに著名人による讚・詩・書・画が散りばめられている。貞巻においても状況は同じである。しかもこれらの讚辞は往々にして、洒落た縁取り、木の葉や岩を象った絵の中に記されており（図版8）、その構図は江戸後期に珍重された中国の詩箋や便箋を想起させる、甚だ意匠を凝らしたものである。

収録曲数は、利巻が十八曲、貞巻が十曲で、合わせて二十八曲であるが、貞巻の曲数が利巻より極端に少ないのは、やはり長篇の曲を収録しているからである。

明治十年に刊行された『月琴楽譜』は、平井連山が関西で、ある程度清楽の基盤を固め知名度を上げた後の作品

として見受けられる。本書に寄せられた著名人たちの数々の讃・詩・書・画は、まさにそのことを物語る。またこれらの有名人の讃・詩・書・画が加わることよって、連山の『月琴楽譜』はなお一層魅力的なものに変わったはずであり、そのことが明治初期の清楽流行に拍車をかけたことは、想像に難くない。そういう意味でも、この資料は大変ユニークな存在であり、なお演文庫所蔵本に関して言えば、出版印・蔵版印及び詩・書・画の落款印すべてが朱刷されており、初刷本に限りなく近いことが判別できる貴重な資料である。

四 重版・翻刻を重ねた『声光詞譜』及びその他

資料5～資料7はいずれも同名の折帖豆本であり、中身も重なる部分が多い。筆者個人蔵の資料の中にもたまたま同名の楽譜が存在するので、まず四者を比較してみることにしよう。

外題	資料5	資料6	資料7	筆者個人蔵
外題	明清楽譜	同上	秘曲 明清楽譜	明清楽譜
巻	三巻(天・地・人)	三巻(雪・月・花)	六巻(天・地・人・雪・月・花)	資料6と一致
内題	声光詞譜	同上	同上	同上
曲目	天命曲等、計六十九曲 地 相思曲等、計三十一曲 人 將軍令等、計八曲	雪 資料5の天と一致 月 資料5の地と一致 花 資料5の人+月宮殿等六曲	天 月宮殿等、計八曲 地 雷神洞等、計五曲 人 琵琶行等、計二曲 雪 花 資料6と一致	資料6と一致
編著者	平井連山著	吉見重三郎編輯	天 人 植西鉄也著、校訂者なし 雪 花 資料6と一致	資料6と一致
校訂者	長原梅園・瀧野蘆白校	校訂者なし		

出版年	明治五年	不明	天々人 雪々花 不明	明治二十七年
出版地	大阪	不明	天々人 雪々花 不明	京都
出版人	平井れん(連山)	不明	天々人 雪々花 不明	高橋品

右記の表からわかるように、これらの楽譜は基本的に重版・翻刻または求版ものである。資料5は明治五年、資料7は天巻・地巻が明治二十七年、筆者個人蔵は明治十年に刊行されており、資料6は刊行年が不明であるが、雪巻・月巻がそれぞれ資料5の天巻・地巻と一致し、花巻が資料5の人巻に新たに六曲を加えて構成されていることから、資料6が資料5を土台にして作られたことは明らかである。つまり、これらの資料のうち最も早い時期に刊行されたのは、資料5である。資料5は著者と出版人がいずれも平井連山になっており、その出版が明治五年と、わりと早い時期に行なわれたこと、またこの資料が他の図書館においてもしばしば見受けられることから、連山が大坂で積極的に清楽を広めた時期に、清楽稽古用のテキストとして大量に出版したものと考えられる。

それを、吉見重三郎という人物が翻刻し、天・地・人の巻の代わりに雪・月・花の巻に装丁を換え、さらに巻末に「月宮殿」等の六曲を付け加えて出版したのが、資料6である。資料6には刊記がないが、明らかに筆者個人蔵の明治十年の『声光詞譜』と同版である。ところがこの資料には、濱氏が他所で撮影した、やはり同版と思われる刊記の写真が添付されており、それには明治二十年に福井の寺木長右衛門という人物によって翻刻出版されたことが記されている。つまり資料5が資料6に翻刻された後も、さらに数度にわたって再版を重ねた可能性が考えられるのである。

資料7は、植西鉄也が著した三巻に資料6の三巻を加えて六巻に仕立てたものである。黄色無地の表紙に金泥の

山模様を描かれており、六冊を順番に並べると美しい一枚の絵になる(図版9)。つまり六冊は最初から一揃いで作られたことがわかる。人巻には「赤壁賦」や「琵琶行」など、清楽では珍しい曲も収録されており、これらは中国から直接伝わったものではなく、日本の明清楽演奏家たちが創作、または琴曲を月琴音楽風にアレンジしたものと考えられる。因みに、著者の植西鉄也は京都で明清楽器屋を経営していた人物である。

資料8は、京都の宇喜多小十郎が編輯、明治十年に滋賀の鳥居兵吉が出版、京都の馬場利助と鳥居亦七が発売したものである。巻頭に「嘯月」と書かれた鉄耕の書と、月琴の絵があり、算命曲等、計二十曲が収録されている。

資料9は、清楽曲の歌詞を日本語で注釈・和訓したものである。注釈はかなり詳しく、和訓もわりと正確である。例えば、算命曲の「姐ツウ在ス房ス中ス綉ス呀ス綉ス花ス鞋ス呀ス」ツウスアイワフンチヨンスイウヤスイウフワヤヤというくだりには、次のような注釈が施されている。「姐ハ女子ナリ。綉ハ繡ノ字ト同字ニシテ、布帛ノ上ヲ絲ヲ以テ、花ナドヲ縫ヒ、美麗ニスルナリ。俗ニ之ヲ縫取ト云フモノナリ。綉呀綉ト二字有ルハ、歌ナル故辭ヲ重ネテ言フマデニテ、別ニ意義無シ。歌ノ辭ニハ、我邦ノ謡曲ニモ、重辭幾多モ有りテ、同シコトナリ。呀ハ歌ノ餘音ヲ永ク引ク聲、ヤアト自然ノ音ナリ。」なお巻頭には挿絵も見える(図版10)。

おわりに

国立国会図書館、長崎県立図書館、上野学園日本音楽資料室に比べれば、瀆文庫の明清楽資料は極少数に過ぎないと言わざるを得ない。しかし、河副作十郎の『清楽曲牌雅譜』や平井連山の『月琴楽譜』など、明清楽研究では決して看過できない貴重な資料が、瀆文庫には所蔵されている。殊に河副作十郎編『清楽曲牌雅譜』は、明清楽の研究だけでなく、明治初期の中国語を研究する上でも、大変重要な手がかりを提供してくれる。また、明治五年に出版された平井連山の『声光詞譜』(天・地・人)は、明治初期の最も代表的な明清楽資料の一つであり、吉見重三郎の同名楽譜(雪・月・花)及び植西鉄也の同名楽譜(天・地・人、雪・月・花)など、その後の多くの明清楽譜がこれを土台にして作られたことは、瀆文庫に所蔵されているこれらの資料を比べることによって自ずと明らか

になるのである。

また、瀆文庫のオリジナルの明清楽資料（写真版除外）七点のうち、三点が明治十年の出版である。筆者個人蔵の『声光詞譜』も同じく明治十年に刊行されたものである。これは決して単なる偶然ではない。明治十年前後は明清楽が最も栄えた時期であり、また日本の出版業が大きく花開いた時期でもある。この二つのことが同時に作用し、明清楽譜の多量の出版を促したことを、瀆文庫の資料は如実に反映しているのである。

最後に、研究に対する瀆氏の謹厳な態度について一言触れたい。前述したように、瀆文庫には瀆氏が他所で撮影した写真版の明清楽資料も数点所蔵されており、中には瀆文庫の資料を撮影したものも含まれている。資料10がそれである。なぜご自分が所持している資料をまたわざわざ写真版にする必要があったのかと、最初は不思議に思っただが、写真を貼り付けたノートにびっしりと書き込まれた、文字の異同に関するメモを拝見した瞬間、筆者は改めて瀆氏に対する深い敬意を覚えた。

【附記】 本報告は、二〇〇八年七月十九日九州大学文学部において開催された九州大学中国文学会第二三六回文藝座談会の席上で行なった口頭発表をまとめたものである。当日貴重な御意見をお寄せくださった諸先生方、並びに今回の調査に御協力いただいた九州大学附属図書館六本松分館に心より厚くお礼申し上げます。

注

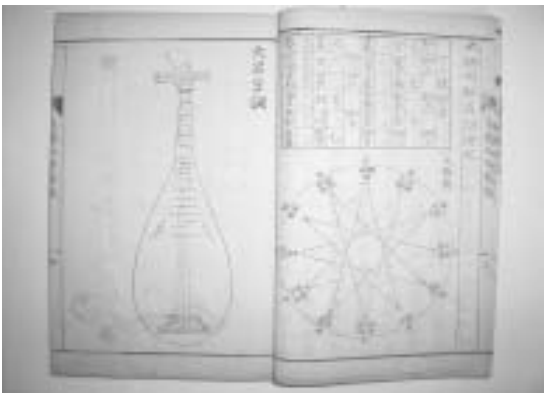
- (1) 「唐人踊について——特に看々踊の興行について——」（九州大学『文学論叢』第三号、一九五〇年）、『明清楽覚え書き 其の一 明楽』（同、第十二号、一九六五年）、『明清楽覚え書き 其の二 清楽（一）』（同、第十三号、一九六六年）、『明清楽覚え書き 其の三 清楽（二）』（同、第十四号、一九六七年）
- (2) 塚原康子著『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』（多賀出版社、一九九三年）、三〇一〜三〇三頁を参照。
- (3) 括弧内の言葉は、筆者が補ったものである。

瀆文庫の明清楽資料について

- (4) 国立国会図書館には四卷揃つて所蔵されている。
- (5) 村田海石(一八三五—一九二二)、名は寿、字は楽山、通称は浩造、海石と号し、晩年は養素とも号した。大阪の人。書を萩原秋巖に学び、独特な書風を立てて一家を成した。
- (6) 羽倉可亭(一七九九—一八八七)、名は良信、字は子文、可亭・亦可草堂と号した。京都伏見の人。村瀬栲亭について経学を学び、僧月峰に画及び篆刻の教えを受けて、後に岡本豊彦に画を学んだ。江戸に出て大窪詩仏の門下となり、有栖川熾仁親王の知遇を得た。
- (7) 長梅外(一八一〇—一八八五)、本姓は長谷、名は允文、字は世文、梅外・南梁と号した。豊後の出身。初め医学を志し、後に広瀬淡窓に就いて儒学を修めた。豊前英彦山に上つて坐主の右筆を勤め、山僧に教授するも、尊皇攘夷運動に身を投じ、毛利侯を頼つて萩藩校教授を務めた。王政復古の後は東京に遷り、斯文学会の講師となつた。長子三州も有名な漢学者である。著作に『梅外詩鈔』『梅外詩話』等がある。
- (8) 田能村直入(一八一四—一八五六)、明治期の京都南画壇を代表する画家。幼名伝太、後に痴と改める。字は顧絶、初め小虎と号し、後に直入・忘齋・幽谷齋・竹翁と号した。幼少より竹田について画を学び、角田九華に儒学を、広瀬旭莊に詩を学んだ。さらに篠崎小竹・大塩中齋に就いて経史を学んだ。明治元年に京都に居を移し、京都府画学校の設立を主唱し、同十四年に初代校長を務めた。
- (9) 谷鉄臣(一八三二—一九〇五)、字は百練、号は太湖・如意山人など。旧姓は洪谷氏。初め林家に経学を学び、後に長崎で蘭学を学ぶ。彦根藩重臣岡本黄石に仕え、後に藩の参政となつた。
- (10) 上田鉄耕(一八四九—一九一四)、明治・大正の日本画家。名は要三郎、鉄耕は号。筑前出身。中西耕石・日根対山の門下で、東京勸業博覧会で活躍した。



図版1 『清楽曲牌雅譜』の見返と序文



図版2 『清楽曲牌雅譜』の口絵と図表



図版3 『清楽曲牌雅譜』の本文と挿絵



図版4 『月琴楽譜』の表紙と題簽

濱文庫の明清楽資料について



図版5 『月琴楽譜』の見返と蔵版印



図版6 『月琴楽譜』の題辞



図版7 『月琴楽譜』の口絵



図版8 『月琴楽譜』の讀辞



図版9 六巻本『声光詞譜』の表紙（金泥の山模様）



図版10 『清楽詞譜和解』の本文と挿絵